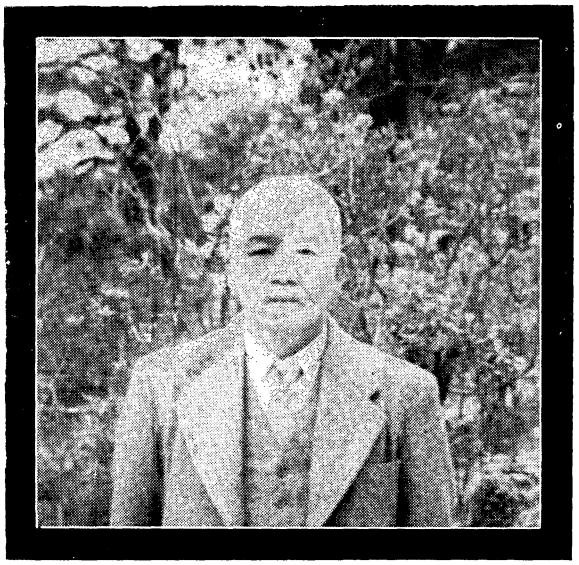

弔　　辞

森先生、先生と申しあげても、今はもうあの温顔と御円満なまなざしをさし向けていただけません。突如として、御逝去の訃報に接し幽冥境を異にする只今。御生前の先生を今更の思いて御追慕申しあげる次第であります。

顧みますと戦火の余燼の消えない終戦の直後、私たちの生物学会は、先生が御大任御多忙のなかにもかかわらず会長御就任を御快諾下さったことによって、昭和22年6月再発足創立大会を挙行し、ここに戦時中の空白を取りもどす機会を与えられたのであります。

再発足後1年、第3回日本生物教育大会の兵庫県会場をひきうけ、あらゆる当時の隘路を克服しての強行ではありましたが、全国からの参会者に満足を与えたのも先生の周到な御指示と御助言とをいただいたたまものでありました。

爾来満15年、毎夏実施いたしました夏季宿泊実習には率先して参加され直接の御指導や寝食をともにする人間関係の場においての人間的御指導御鞭撻は、他の学会や研究会においてはみられない私たちのみの恵まれた成果であったと存ずるのであります。

なお、ここに特別大書して感謝しなければなりませんことは、本会が地方的学会でありながらその内容が年々ますます充実進展し機関誌「兵庫生物」も今や一地方学会のものでなく全国専門学者間にも高く評価されるようになりましたこと。この陰には発行ごとに先生の御指導と経済的な御援助があったことにより隆々たる進展と継続とができていることでありました。一昨年先生の兵庫県文化賞御受賞の際にも関係者が森会長御健在の間は存続すると申して居りますのもその間の消息を物語るものであります。

お別れにあたり、本会のためにたまわった物心両面の限りない御配慮と御援助に対し深甚の感謝をささげるとともに、先生亡き後も先先の御遺志を守り続ける覚悟でございます。先生幽冥境を異にいたしましても、どうぞ私たちの今後をお見守り下さいますようお願いいたします。

回顧追慕申しあげる言葉は尽きませんが、ここに御冥福をお祈りして粗辞ながら弔辞といたします。

昭和37年7月20日

兵庫県生物学会代表

理事長　紅　谷　進　二

会長　森為三先生のせい去を悼む

紅　谷　進　二

去る７月18日森先生の御せい去の知らせをうけ夢ではないかとその御急せいに驚いたのである。

先生は本年度生物学会の総会を武庫川学院で開催することに決定してから何くれとなく気を配っておられた。この度の総会に武庫川学院から物心両面に全学院をあげて多大の御厚意をいただいたのは、森先生が昭和32年10月以来同学院生物学主任教授として御信任の厚かった賜であると信ずる。

総会の直後、赤血球の減少による貧血症とかで欠勤され、その原因が脾臓にあるとか、潰瘍性のものであるとかのことであったが、夏季休暇が目前に迫っているので休暇中に入院して精密検査を受けたうえで適当な施療をするとのことで１週間ばかりの欠勤で７月の講義の終るまで出勤されたのである。

その後、７月11日神戸大学付属病院に入院されたとのことであったので、早く病因をつきとめられ適切な施療のあるよう祈っていた矢先であったので、思いがけぬ悲報で全く痛惜にたえない。御家族御近親の方々の御悲歎も御想像申しあぐるのに余りがある。

武庫川学院には本年から薬学部が創設され同科生物学科の重責を担われることになり、先生のかつて御担当になっていた一部週６時間の分担を命ぜられたため、私は去る５月から先生の教室へ週２回ずつお邪魔することになり、今後ま近かに先生の御指導や御高説を承りながら御円満なお人柄に接する機会ができたことをひそかに喜んでいたのである。しかし今はもうその念願も絶たれた、実に寂寥にたえない。

先生は本年１月から３月末までの間に３回にわたって、皇太子殿下御夫妻及び御陪聴の各大学、水産研究所の専門学者を前に、東南アジヤの鯉亜目の系統発生学的事項、鯉亜目の進化、鯉亜目の分類分布、分布の要因などについて先生多年研究に努められた御うん蓄を傾注され、あるいは欧米諸学者の学説を引用される等周到な御準備の下に計６時間御進講後、毎回約１時間にわたる質疑応答などに奉仕されたとのことである。本年５月本会の総会においてその要綱を御披露下さったが今にして思えば、先生の科学者として最後の晴れの舞台であったと御想像申しあげる。先生御自身生涯を通じて忘れることのできぬ感謝と感激であるとおっしゃって終られた。このことを考えせめてもの慰さめであると思う。

しかし御在職の武庫川女子大学の新学部創設に伴う諸施設、講座の基礎確立などに種々遠大な御理想、御構想を描かれて９月の休暇あけを待たれていたであろうと御想像申しあげるとき、いよいよ痛惜、哀悼に絶せるものがある、ああ哀しいかな。ここに改めて先生の御冥福をお祈りする。

先生の学界への御貢献、本学会並びに本会会員に賜わった数々の御教訓、後進学生に対する御指導に円満な博学者でなくては望まれない豊かな教育者の生涯であったことを物語る数々は昭和33年先生が兵庫県文化功労賞御受賞記念号として出された本会誌（昭和34年４月30）に多数の方々から詳細寄せられているのでこれを割愛し、先生公職御退任記念に発行された、魚類学雑誌第６巻第４・５・６号に集録された先生の御略歴をお借りし先生の御経歴と御功績の由来する原因とを偲ぶこととする。

御　略　歴

明治17年６月１日生れ	
明治37年８月	東京帝国大学付設教員養成所博物科卒業
明治44年	宮城高等普通学校教諭
大正10―11年	英国ロンドン大英博物館博物部において朝鮮産哺乳類、北米合衆国スタンフォード大学において朝鮮産魚類について研究
大正14年６月	理学博士　（京都帝国大学）
昭和17年	朝鮮文化功労賞（朝鮮総督）
昭和21年	兵庫県立医科大学予科長兼教授
昭和24年	兵庫県立農科大学教授
昭和26年	兵庫県立農科大学副学長
昭和32年	武庫川女子大学教授
昭和33年	兵庫県文化功労賞（兵庫県）

昭和37年1—3月　皇太子殿下御前御進講
昭和37年7月18日　逝　去

故森為三先生御葬儀告別式に参拝して

昭和37年7月20日姫路市光源寺において仏式をもって多数の参列者でしめやかなうちにも厳粛な告別式が営まれた。当日諸学校とも第1学期末の終業式が行われたが、阪神地区からは室井、当津、渋谷、古川、川崎、広瀬、地もとからは森本氏など、その他多数遠近の会員参列し次のような弔辞を霊前に捧げた。

森博士への感謝と生物研究奨励会

室　井　綽

私はかつて森為三会長県文化賞受領記念号（第3巻5号）のp.338に次の文を載せた。すなわち

何処へ旅しても、あの膨大な「兵庫生物」が何故続くか、どこの生物の地方誌も、先ず3号雑誌になることに決っているのに兵庫生物だけが何故、このおきてを破って続々と刊行され、ますます内容が充実するのかとの疑問を受けるのである。

私は即座に半永久的に続く、それには続く条件が揃っているからだ。先ず少くとも森会長の健康な間は続く、何故ならば総べての尻ぬぐいは会長自身が私費をなげ打ってみてくれるからだ。と答える。

そう思って方々の地方誌を見直してみると、発刊後すぐ跡方もなくつぶれてしまう。また本県内の他の学科にしてもそうで始めのうちは可成り景気よくやっているようだが、いつとはなしに3号誌で終止符が打たれる。考えてみると気の毒なほどである……。である。

本誌が今日の隆盛を得たのは1つは先生の経済援助があったことである。先年、理事会で会長の本会の役員会への出張旅費ぐらいは差し上げる……。と可決してみたが全然受け付けられなかった。それのみならず時々多額の金子を寄付されたことは感謝に耐えない。

ところが去る7月19日、早朝、紅谷先生から電話で森会長の訃報を聞かされて、本会のためにも、我々会員のためにも思いがけぬ悲報で全く参ってしまった。

その後、第2学期の始った9月1日午前9時、暑いさなかに森会長の奥様が学校へ御出下さって、奥様の言われるには先生の御香料から本会へ100,000円を贈りたい。使途については本会に一任する。と言われ全く恐縮した。

この御寄贈のお金の使途について早速、理事会を開催して、下記の「森為三博士生物研究奨学会規約」を条文化し、来春の総会にかけて会員諸氏の承認を得ることになった。

森会長への感謝の言葉は尽きませんが、会員諸氏とともに篤い感謝とともに御冥福をお祈りしたい。

森為三博士生物研究奨学会規約

1. この会は、森為三博士生物研究奨学会といい、兵庫県生物学会が運営する。
2. この会の基金は森博士の寄付金とし、その利子を奨励金にあて基金は永久に保存する。
3. 奨励金が、1,000円未満のときは、その端金を翌年に廻すことがある。
4. この奨励金受賞の資格は次のものに限る。
   (1) 兵庫県生物学会会員で生物学、または生物教育の研究に貢献したもの
   (2) 年齢に制限なく、研究心の旺盛なもの
   (3) 受賞者は毎年1名を原則とする
5. 受賞候補者は会員が会長に推薦し、会長が最終決定をする。
6. 会長は受賞者候補選定の委員会を組織し、会員、または有識者の意見を聞くことができる。
7. 受賞者の発表及び賞金受与式は総会当日行なう。
8. 基金は（電話公債、割引公債、郵便貯金、銀行預金、株券）とし、会長及び会計で証書及び印鑑を別々に保管するものとする。
9. この会の会計監査は兵庫県生物学会の監査委員が行なう。

付則　1. この会の規約の変更は総会で決める。
　　2. この会の成立まで基金は室井が保管する。
　　3. この会の趣旨に賛成したものの寄付金は基金に繰り入れることができる。